

規範と社会的ネットワーク

成 富 正 信

一 はじめに

社会的ネットワーク分析は、従来の社会学および社会人類学において支配的であった構造—機能モデルに代わる新たな社会行動の分析モデルの構築をめざして展開されてきた。⁽¹⁾ 構造—機能主義的分析においては、社会は、地位や役割から構成された、明確な境界をもつ集団的システムとして概念化され、その中での人々の行動は、システムの均衡へ志向する規範や価値によって規定され拘束されるとみなされる。だが現実社会においては、集団的境界を越えた行動や、規範的拘束によっては説明し難い複雑な動機や欲求によって動かされる行動を随所にみることができ。それらの行動は、他者との利害調整や駆け引き、信頼や不信、援助や無視、連合や対立といった多様な相互関係の中で展開されているが、その多くは制度的に期待された役割規範から多少ともはずれているか、または制度化される以前の一次的、流動的な性質を帯びたものである。そうした行動は、構造機能主義的分析では逸脱行動

か、あるいはせいぜいインフォーマル行動として扱われるにすぎないが、ネットワーク分析においては人々が社会との第一次的な接点をもつのはむしろそのような行動によってである、と考えるのである。

ネットワーク分析では、個人は、規範を通じて社会に統合されるというよりも、第一義的には知人や友人、隣人、親族、仕事仲間といった、具体的な他者との関係を通じて社会に結合するとみなされる。そして個人はそれらの関係を通じて社会に規定されると同時に、自己の目的の実現を向けて関係を操作することにより社会を規定し返す能動的主体でもあるとみるのである。ネットワークとは、個人と個人が取り結ぶ社会関係の連鎖によって成り立つ複数の人間のセットのことであって、ネットワーク分析は、個人間の関係を成立せしめる物質的・非物質的な交換内容とそれらの関係の総体としてのネットワークの形態的構造に着目しながら、それらの要因が人々の行動にどのような影響を与えるかを解明しようとするのである。⁽²⁾

しかしながら、社会行動研究における規範の一面的強調を批判するとはいえ、ネットワーク分析においても規範的要素そのものを無視することはできない。なぜなら、きわめて多くの場合、人々は「それが道徳的に正しいから」とか「社会が期待しているから」といった理由で行動し、また他者の行動を社会的価値や慣習に照らして解釈することもまた事実だからである。それゆえ、ネットワーク分析の重要な課題の一つは、人々の相互作用を規定する諸要因の総体の中に、規範的要素を正當に位置づけて解釈しうる分析枠組を提示することにあるといわなければならない。そこで本稿では、このような課題追求の手がかりとして、これまでのネットワーク概念を用いて行なわれた諸研究の中から、異なる視角をもつ二つの研究事例を取り上げて、そこで規範とネットワークがどのように関連づけられているかを考察してみたい。第一の研究事例は、E. ボットの家族役割に関する研究(E. Bott, 1955, 1957)で

二の研究事例はB・カフエラーの、一工場内で生じた労働者間の葛藤に関する研究(B. Kasperer, 1969)である。

二 家族規範のヴァリエーションとネットワーク

一 家族の役割関係とネットワーク構造

ボットの研究は、ロンドンに住む二〇組の若い夫婦家族を対象として、それらの夫婦の役割関係にみられるヴァリエーションを、家族外の社会環境と関連させて分析したものである。各対象夫婦に対する平均一三回の訪問面接調査を軸に、日常生活における家族行動の詳細な観察や精神分析家を交えた個人に対する臨床面接などの方法を用いることによって得られた質的データがこの研究の基礎をなしている。

ボットは、得られたデータから、まず夫婦役割関係の二つのタイプを析出する。⁽³⁾ 第一のタイプは「合同的夫婦役割関係」(joint conjugal role-relationship)と呼ばれる。これは、夫と妻の果たすべき課題が明確に分化していないか、または分化が一応みられても夫婦間で課題が適宜交換されているような家族である。そのような家族では、夫婦が家族の重要問題を相談して決め、余暇時間も一緒に過ごし、また趣味や関心も分化しておらず、共通の友人をもつという傾向がみられた。第二のタイプである「分離的夫婦役割関係」(segregated conjugal role-relationship)では、夫婦間で家族課題に関する厳密な分業が行なわれており、夫と妻がそれぞれの課題を独立して遂行していた。このタイプの夫婦は、趣味や関心も相違し、余暇活動を共にすることは少なく、夫は自分の友人との、妻は自分の親族とのつき合いに多くの時間を費やしていた。この二つのタイプの夫婦は、いずれも自分達の行動がとくに

異例だとは考えておらず、むしろかれらの身近な家族の間でごくふつうにみられるものだと考えていた。

このような夫婦役割関係のヴァリエーション、すなわち夫婦役割の分離度の相違が、どのような家族外の社会的要因と関連しているかを分析し説明することがポットの中心的主題であった。彼女はまず社会環境の諸要因のうち、それぞれの家族が所属する社会階層および居住地域の性格との関連を見い出そうと試みたが、結果的にこれらの要因では夫婦関係の分離度の相違を十分説明することはできなかった。そこで次にポットは家族の直接的环境、すなわち友人、隣人、親族との外部的社会関係を目を向ける、ポットによれば、対象家族の外部的社会関係は、「組織的集団」の形式ではなく「ネットワーク」の形式をとっていた。組織的集団においては、その全構成員が、共通の目的、相互依存的役割、独特の下位文化をもつより大きな社会的全体を形成するのに対して、ネットワークでは、構成員のすべてではなくその一部だけが相互に社会関係をもつ。例えば、ある家族Xが、A、B、C、D、E、Fとして示される友人、隣人、親族との関係を維持しているとすれば、BはAとCを知っているがその他は誰も知らず、またDはFを知っているがA、B、C、Eを知らないといった関係にあり、さらにそれらの外部の人間のすべてが家族Xの知らないそれぞれの友人、親族、隣人との関係をもっている場合、家族Xの外部的社会関係はネットワークを構成しているとみなすことができる。すなわちネットワークとは、その全構成員に共通の境界をもたず、構成員間の個別的関係の連鎖によって編成されている社会形式のことである。

このネットワークの構造的特性としてポットが重視するのは、ネットワークの「連結度」⁽⁴⁾ (connectedness)である、これは、「ある家族が知っている人々が、当の親族とは無関係に相互に知り合い、接触する程度」として定義される。ネットワークは連結度の相違によって二つのタイプに区別される。すなわち、構成員間の関係が非常に少

ない「編目のあらいネットワーク」(loose-knit network)と、そのような関係が多く存在する「編目の密なネットワーク」(close-knit network)とである。いいかえれば前者は連結度の低いネットワーク、後者は連結度の高いネットワークである。ポットはこの連結度の概念を用いて調査データを検討することにより次のような仮説を導き出した。すなわち「夫と妻の役割関係における分離の程度の相違は家族の社会的ネットワークの連結度と直接対応している」⁽⁵⁾。この仮説では、連結度の高いネットワークをもつ家族は、夫婦役割の分離度も高く、一方連結度の低いネットワークをもつ家族は、役割の分離度が低い合同的関係を示すとされる⁽⁶⁾。

このように記述されるネットワークの連結度と役割分離度の相関関係を、因果関係として説明することは可能であろうか、この点に関して、ポットは、いくつかの典型的な事例を一般化することによって、次のような説明を試みている。編目の密なネットワークは、夫と妻のいずれもが、その友人、親族、隣人と同じ地域で育ち、結婚後もそこに住み続けている場合に発達することが多い。彼らは結婚以前から編目の密な同性間ネットワークを作り上げており、その中で多様な物質的・情緒的な援助を交換し合っている。また彼らは情緒的に親密であるばかりでなく、互いに頻繁に相互作用するために同じ規範を共有しやすく、また規範からの逸脱に対して一貫したインフォーマルなサンクションを適用することが可能である。そのような規範的合意がさらに相互の援助を義務と感じさせるような圧力を人々に加えるのである。夫婦それぞれの同性間ネットワークは、結婚後は若干修正されるとはいえ基本的に持続される。すなわち夫婦の双方が結婚後も家族外の友人や親族と行動を共にし、その中で情緒的欲求を充足させることが多く、また夫婦それぞれの家族課題の遂行においても、家族外からの援助を受けることができる。したがって彼らは配偶者に依存する必要性が少なく、夫婦間の明確な分業関係を維持することが可能である。

これに対して、編目のあらいネットワークは、結婚以前から居住地域を何度か変えているような夫婦、あるいは古い関係とは連結しない新しい関係を多く形成している夫婦にみられる。彼らとつき合いを持続している少数の古い友人は新しい友人のことを知らず、また新しい友人同士も知り合いではない。夫婦はそのような友人のネットワークに物質的・情緒的援助を求めることができないので、家族内外の課題に対して夫婦が一致協力して対処しなければならぬ。したがって彼らの間には、合同的な余暇活動、共通の関心、夫と妻が平等であるという考え方が発達しやすい。

以上のように要約されるボットの説明を因果関係としてより整序した形で解釈し直すとすれば、次のようになると考えられる。

(1) 連結度の高いネットワークでは、構成員の間に物質的・情緒的な相互援助関係が発達している。したがって人々はネットワーク内で多くの個人的欲求を充足させ、夫婦それぞれの家族課題の遂行に対しても家族外から援助を受けることができるので、夫婦が相互に依存し合うことは少なくなる。他方連結度の低いネットワークでは、構成員間の相互援助関係は発達しないので、夫婦は情緒的欲求の充足と家族課題の遂行のいずれにおいても相互に依存し合わなければならない。

(2) 連結度の高いネットワークでは、相互作用が頻繁に行なわれるために規範的合意が得られやすく、また標準化された行動へ同調させるような圧力も効果的に作用する。したがって夫婦関係の規範は外部的社会関係の規範に強く拘束されたものとなる。これに対して連結度の低いネットワークでは規範的合意が得られにくく、標準化された行動への同調を促す圧力もほとんど存在しない。したがって夫婦関係の規範が外部から拘束されることは少

ない。

(3) (1)、(2)の結果、連結度の高いネットワークをもつ家族では、夫と妻がそれぞれ独立して自己の課題を遂行することが期待され、厳密な分業関係が形成・強化される。他方連結度の低い夫婦では、分業よりも協力し合って家族課題を遂行することが強調され、合同的関係の維持に最大限の関心が払われるようになる。

ところでこのボットの説明は、ネットワークと規範の関連という視点からみると、重要な問題点を孕んでいるように思われる。ボットの論理展開では、連結度の高いネットワークにおける緊密な相互作用が高度の規範的合意をもたらし、それが人々のネットワーク内行動と夫婦役割遂行とを拘束する結果、分離的な夫婦役割規範が形成・強化されるということになる。もともとネットワーク内の援助関係が分離的夫婦役割の遂行を可能にするという分析も行なわれているが、それはあくまで役割遂行の条件を指摘したにすぎない。ところが、連結度の低いネットワークに関しては、そのようなネットワーク構造が合同的夫婦役割規範の形成・維持にどう作用しているかという側面についてはほとんど触れられていない。いいかえると合同的役割規範は夫婦間の相互依存の必要性から自然に獲得されるかのように説かれていて、ネットワーク構造自体が合同的役割という特定の内容をもつ規範をどのようにしてもたらすのかについては積極的な説明がなされていないのである。

ボットの研究の独自性は、家族の役割関係を家族の内部構造からではなく、家族外の社会的ネットワークの構造と関連させて分析することにあった。とすれば合同的役割規範に関しても、それが編目のあらいネットワークの構造を通じて形成・維持されるメカニズムが説明される必要がある。ボットの研究はこの点に関しては不十分であるといわざるをえない。

だが彼女は、具体的な内容をもった役割規範に関する説明とは別に、「正常家族」の規範というより一般的な観念が、調査対象家族によってどのように獲得されるのか、またそれがどの程度明示的なものであるかを、ネットワーク構造との関連で分析するという興味深い記述を行なっている。そこで次にこの点に関して検討を加えてみたい。

二 「正常家族」の規範とネットワーク構造

ボットは「規範」概念を、「人々が自分達の社会的サークル内でどんな行動が慣習的で、正しく、適切であるかということについて抱いている観念」とした上で、それをさらに三つの下位概念に区別する。第一は「社会的規範」であって、これは人々が、一定の社会集団ないしカテゴリーの中で一般に通用していると考えている規範である。第二は、社会的規範のうち、実際に一定の集団ないしカテゴリーの人々によって意見が一致している規範であり、これは「満場一致の規範」と呼ばれる。第三は、「個人的規範」であり、これは人々自身が、社会的規範とは異なった自分たちの私的な標準だと考えている理想を意味する。

このような区別がなぜ必要かといえば、家族生活の規範のように誰でもがもっている規範の場合、人々の間には高度の規範的合意がみられると想定されることが多いからである。だがこのような見方は、小規模な同質的社会ではともかく、複雑な大規模社会にはほとんど適合しないのである。実際先に述べたように、調査対象夫婦においても夫婦役割の規範には明らかなヴァリエーションがみられたのである。したがって、個々の夫婦が抱えている社会的規範と、それらが客観的にみて相互にどの程度一致しているかは区別して考察されなければならない。

ところで、ボットは調査を開始した当初においては、規範の内容はさまざまであるとはいえ、個々の夫婦はフィールド・ワーカー達に対して、首尾一貫した規範を明確に言明しているものと考えていた。ところが実際にはそれ

らの規範はワーカーとの会話のはしばしでそれとなく述べられた話を、ワーカーが自分の解釈によって再構成したものである場合が多かったのである。そこでボットはより一般的、抽象的な家族規範について直接質問することによって、調査対象夫婦が家族規範をどの程度明示的に表現できるかを知らうとしたのである。

このようにして得られたデータによれば、調査対象夫婦が、規範の内容ばかりでなく、規範を明示的に表現する程度、およびそれを表現する仕方においても、かなり大きなヴァリエーションを示していた。そしてこの規範表現のヴァリエーションはまたネットワーク連結度と密接に相関することも明らかであった。ボットの分析結果を要約すれば次のようになる。編目の密なネットワークをもつ夫婦では、個々の夫婦が抱いている社会的規範が相互に一致する程度が高かった。すなわちかなり多数の満場一致の規範が見い出された。また彼らは規範をかなり明示的に表現することができたが、その際自分の所属するネットワークを規範表現のための準拠集団として用いることが多かった。ただし彼らはネットワークを、自分の住む地域 (local area) として概念化する傾向があった。

一方編目のあらいネットワークをもつ夫婦では、満場一致の規範は少なく、規範のヴァリエーションが大きかった。また彼らは規範を明示的に表現せよという質問への回答にかなり苦慮する傾向があった。とはいえ彼らも暗黙のうちにではあれ社会的規範をもっていることは確かであった。ただし彼らは規範に言及する際、自分が直接接触している友人や親族ではなく、「われわれに似ている人」とか「われわれの同類」といった、何らかの種類の抽象的カテゴリーを引き合いに出す傾向があった。

このような分析結果から、編目の密なネットワークにおける規範の一致度の高さ、および明示的な規範表現を困難に説明することは比較的容易である。すなわち連結度の高いネットワークでは頻繁に相互作用が行なわれるた

めに規範的合意が達成されやすく、また自分の行動が満場一致の規範から逸脱していることに気づく機会も多い。したがって人々は規範を容易に内面化するとともに、具体的な準拠集団を用いて規範を明示的に表現することができる、また、たとえ自分が準拠集団の規範とは違う個人的規範をもっているとしても、それを社会的規範と同一視する可能性は低くなる。

これに対して編目のあらいネットワークにおいては問題はかなり複雑である。連結度の低いネットワークでは相互に知り合いである人々は少なく、相互作用も少ないために、規範のヴァリエーションが大きくなる可能性が高い。人々の自分の個人的見解を社会的規範とみなしてよいか否かを確認する機会をもてないために、規範を明示的に表現することが困難になる。だが編目のあらいネットワークをもつ人々も、暗示的にはあれ、社会的規範を表明していた。それが社会的規範である以上外部から獲得されたものでなければならぬ。とすればそれはどのようなメカニズムによって獲得されるのか、ここでポットは、規範の内面化という、従来の社会化理論が強調してきた概念に加えて、規範の「投射」(projection)という概念を導入する。編目のあらいネットワークにおいても人々は友人や親族との直接的接触の経験の中から規範を内面化する。ただしその規範はきわめてヴァリエーションの大きいものであって、時には矛盾した内容をもつ場合がある。そこで人々は多くの異なる規範のうちから、自己の個人的欲求に見合う規範を選択し、自分なりに再構成する。そして彼らはそれが社会的規範であることを確認するために、広範囲の準拠集団ないしカテゴリーの中から、彼らの規範の受け手を選択するのである。このタイプの社会的規範は、必然的に、それを表明する際の状況や文脈に応じて変化するものとなる。いいかえると、状況や相互作用の相手にふさわしいとみなされる規範がその都度選択されるという性質を帯びることになる。

以上のようなボットの議論は、規範分析に関する重要な問題を提起していると考えられる。すなわち、これまでの社会学の通説では、他者との相互作用を通じて規範の内面化過程がもっぱら強調されてきた。そこでは個人は外部的規範の受動的な受け手とみなされがちであった。だがボットは個人による社会的規範の獲得において、たんに一方的な内面化ばかりでなく、外部的規範からの意識的無意識的な選択による規範の再編成、さらにその規範に適合する準拠集団の選択および特定の行動の状況にふさわしいと思われる規範の選択という「投射」の過程が重要な役割を果たすことを指摘したのである。このような内面化と投射という規範獲得の二つのメカニズムは、編目の密なネットワークでは分離することは困難である。なぜなら規範の選択によってもたらされる個人間の意見の不一致は不断の相互作用によって即座に矯正されてしまうからである。したがってこの二つのメカニズムは編目のあらいネットワークを観察することによって初めて確認しえたのである。

ボットは規範の選択性という重要な問題を提起した。だがそれは彼女の研究全体からみれば、編目のあらいネットワークをもつ夫婦における規範の相対的な不明確さを説明するための付随的議論として展開されたという感が強い。しかも何故特定の規範が選択されるかということやボットの理論は説明していない。すなわち規範は選択されるかといっているが、その選択そのものに作用する要因については、個人的欲求との適合性や階層規範の作用以外にはほとんど言及していない。だがネットワーク分析の視角からいえば、規範の選択を左右する要因こそがネットワークの構造と関連づけて考察される必要があるのではなからうか。しかしそれはネットワークの連結度（あるいは相互作用の頻度）という要因のみによって説明することは不可能であろう。

ボットの主要な関心は、夫婦役割行動を規定する家族規範が家族外の社会的ネットワークによってどのように形

成されるかという問題の解明に向けられているので、焦点はどうしても家族規範が明示的に現われる編目の密なネットワークの分析におかれざるをえない。したがって編目のあらいネットワークの分析は不十分になってしまったと思われる。だがより重要な問題は、ボットが、規範が行動を拘束するという構造―機能主義の分析枠組にとらわれており、ネットワークは規範を媒介にして間接的に行動を規定するとみているために、規範の選択という行動そのものがネットワークの構造によって規定されるという視点をもちえなかった点にあるように思われる。次に述べるカフェラーの研究は、ボットとは対照的に、規範の選択性そのものは与件とみなして、ネットワーク構造が現実行動を直接規定し、そのことがさらに規範の選択に作用するという視角をとっている。

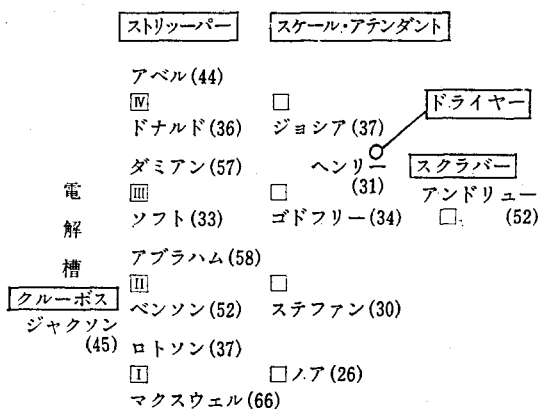
三 葛藤状況における規範とネットワーク

一 葛藤とその背景

カフェラーの研究は、アフリカのザンビアにある亜鉛精製工場の一作業室内でアフリカ人労働者達の間に生じた口論を、ネットワーク概念を用いて分析したものである。ここで口論の分析にふれるまえに、作業室内の状況と口論の内容に関するカフェラーの記述を要約しておこう。

研究対象となった作業室では、電解槽に注ぎ込まれた亜鉛の溶解液にアルミニウムの陰極板を入れ、そこに付着した亜鉛の皮膜を作業台の上で剥ぎ取り、さらにそれを計量室に運び込むという作業を担当していた。作業は一チーム一五人の労働者によって行なわれるが、その役割分担は以下の通りである（図1参照）。まずストリッパーと

図1 作業室内の人員配置 ()内は年齢



注：Kapfere (1969) p.185, の図を簡略化して示した。

呼ばれる八人は二人一組になって四つの作業台で作業する。彼らは陰極板を台の上に引き上げて亜鉛の皮膜を剥ぎ取った後、陰極板を掃除ないし新しいものと交換してから再び電解槽に戻す係である。また四人のスケール・アテンダントは剥ぎ取られた亜鉛を計量室に運ぶ係である。この他腐食した陰極板を新しいものと取り替えるスクラパー、硫酸で濡れている皮膜を乾かすドライバー、それに作業全体の管理責任を負い、とくにストリッパーの作業速度の調整に気を配るクルーボスが各一名ずつ配置されている。

作業は午前七時から始まり、一時、またはストリッパーが一日の割当て分の作業を完了した時点で終了する。給与は全員出来高払い制だが、支払い率には職務に応じた

相違がある。作業室内での労働者の相互作用の最も重要な基礎は作業上の関係にあるのは当然だが、その他出身部族、年齢、宗教、それに役職(例えばクルーボスや労働組合の役員)に基づく権威などが労働者間の接触や相互作用の程度に影響を及ぼしている。

このような作業室内の状況の中で、二人のストリッパーの言い争いに端を発し、チーム全体を巻き込んだ口論とは次のようなものであった。(ここでは労働者達の会話の内容が重要な意味をもつので、煩をいとわず引用するこ

とにする。また図1も参照のこと。）

作業室のいつもの喧噪とざわめきは、アブラハムが四番台のドナルドに向かって発したどなり声によって突然破られた。「おい『進歩』（ドナルドのあだ名）、手をゆるめて、おれたちに合わせな。」作業班の中は静まり返った。しばらくの間ドナルドは知らん顔していた。するともう一度アブラハムが「おい、進歩」と呼んだ。これが反応を引き起こし、ドナルドが言い返した。「おれにはきちんとした名前があるんだから、あだ名で呼ぶな。」アブラハムは「おれはおまえのあだ名しか知らないよ」と応酬した。ドナルドは激怒してどなった。「おれ達若いもんは呪術（witchcraft）をかけられないように気をつけなくちゃならないぞ。」アブラハムがこれに賛成して「まったくお前の言う通りだ。お前達が目上の者を尊敬しないと、呪術をかけられちまうぞ。」それでドナルドは激昂して、まっすぐ組合の職場委員のロトソンの所へ行き、アブラハムが呪術をかけるとおどかしたことについて正式の抗議を申し出た。それから彼は……作業台の方へ戻っていったが、ちょうど三番台のそばを通りかかった時……ソフトがジョシアに向かって、はつきり聞きとれる声で批評しているのを耳にした。「ドナルドの奴、きつと酔っ払っているんだ。そうでなければあんな振舞いは理解しようがないよ。」ドナルドは怒ってソフトに詰めよった。ソフトは彼をなだめて、自分の台に戻るよう説得しようとして言った。「おれはなにもお前のことを言ったわけじゃない。」クルーボスのジャクソンは、それまで脇の方からこの口論を面白そうに見守っていたが、このときに割り込んできて、ドナルドに作業に戻れといった。ドナルドは自分の台に戻りながら、いかり声でぶつぶつ言っていた。「おれは誰にも『進歩』だなんて呼んでもらいたくないんだ。おれにはドナルドっていうちゃんとした名前があるんだ。」

それで作業はほぼ正常に戻った。……休憩時間になって、ソフトがロトソンのそばにやってきて座った時、再びこの出来事に作業班の労働者達の注目が一斉に注がれることになった。ロトソンはソフトに、作業中に何故彼がドナルドと言い争ったのかと尋ねた。「それがおれのやるべきことだったからだ。なのにドナルドはおれの言うことをちゃんと聞いていなかったんだ」とソフトはぶつぶつ言った。……。ダミアンとジャクソンは、彼らが立っていた四番台の所からこちらにやってきて、ロトソンとソフトを取り囲んでいる連中の回りをぶらぶら歩いていった。そこでソフトは詳しく話し出した。「ドナルドはビールを飲みすぎていたんだ。それがあいつにあんな振舞いをさせた原因なんだ。おれたちはみんなあいつのことをあだ名で呼ぶしかないな。」近くでゴドフリーとステファンという二人の友人と口論について論じ合っていたドナルドがこれを見て、たま

らず口をはさんだ。「おれとしちゃ、ドナルドっていうきちんとした名前があるのに、『進歩』なんて誰にも呼んでほしくないんだ。酒を飲んでしたことなんて関係ないんだ。けんかになったのは、アブラハムがおれのことを無理矢理あだなで呼んで、おまけにおれが文句をいったらちゃんと答えないで、おれに呪術をかけてやるといつておどかしたからなんだ。」ここでロトソンが急に疑うような笑い声を立てた。それからドナルドに彼が激昂した本当の理由を尋ねた。「ソフトがお前のことを酔っ払いといったから怒ったのか。それなら、おかど違いだ。」ソフトが割り込んでいった。「ドナルドがそんな風に反発したのは、若い者から批評されたからだ」「いやまったく」と彼は強い口調で言った。「ドナルドの振舞いには言い訳の余地はないよ。」アブラハムは一番台の近くに腰かけていたが、ドナルドに向って、おれのいる所に来いよ、と呼びかけた。……ドナルドと一緒にいた連中は皆彼に行くように勧め、しつこく促されてからやっと彼はアブラハムの所へ行った。ロトソンとアベルとソフトは、ドナルドはもう呪術をかけられることを恐れる必要はないなど冗談をいい合った……アブラハムはドナルドに作業用のフックを研いで来てくれ、と頼んだ。この仕事を仕上げてフックを地主に返してからドナルドは、計量室近くに腰かけていた……スケールアテンダントの集団に加わった。

アブラハムを含めて、作業班のほとんどの労働者には、口論はそれで終わったと思われた。だがドナルドにとってはそうではなかったことが数日後に証明された。ドナルドはアブラハムが呪術をかけようとしていると再び非難し、アブラハムが悪意をもっているという疑惑を作業室から鉱山の別の部署への転属を志願するための口実として利用した。彼の志願は成功し、彼は地下作業に転属させられた。⁽⁹⁾

二 葛藤の規範的分析

以上のような口論は何故生じたのか、何故アブラハムがドナルドを非難したのか、それに続く個々の労働者の言動はどんな要因によって引き起こされたのか。これらの問題を解明するためにカフェラーは、まず規範的分析を試みている。

労働者達の発言の内容を検討してみると、彼らがいろいろな規範を持ち出して、相手がそれを犯したと非難し合っていることがわかる。彼らが言及した規範とは、作業速度、呪術、若い者が年長者を尊敬すること、酒を慎むこ

と、本名で話しかけること、などに関するものである。それぞれの規範はそれに意味を与えている文脈の中で理解する必要がある。

まずアブラハムが最初の非難の根拠に用いた作業進度違反とは次のような意味をもつ、この工場の経営者は、あまり速く作業するよりも一定の速度でやる方が安全で無駄が少ないという考え方をもち、それをクルーボスを通じて労働者達に徹底させようとしていた。しかも垂鉛の電気処理には一定の時間がかかるので、労働者達は一日の割当て分の作業を一時よりも早く終らせてしまうと、余った時間には別の作業をしなくてはならなくなるのだが、それには超過手当は支給されないし、また毎日そんなことが続くと、それが規則になってしまいかねない。また逆に割当て分の作業の終了が一時を過ぎてしまった場合にも、その余分の作業時間に対して超過手当がもらえるわけではない。こうした事情から、作業がチーム全体としてちょうど一時に終るように作業速度を一定に保つというインフォーマルな規範が形成されていたのである。

だが作業速度に関してはもう一つの規範があった。作業速度は九時一五分から一〇時までの休憩時間以前は抑えられていたが、それ以後は四つの剥ぎ取りの組が、それぞれ他の組より少しでも早く終ることで自分達の能力の優越性を確かめようとして、互いに競争していたのである。そのような競争が許されていたのは、休憩後の短い時間では、いくら速度をあげてもせいぜい数分早く終る程度であって、それは他の労働者の作業に影響を与えるほどの時間ではないからであった。したがってアブラハムが非難した理由は、ドナルドの組が休憩前に作業速度を早めていたからであると解釈することができる。

ところがアブラハム以外の労働者にはドナルドを非難する根拠として作業速度違反をあげたものは一人もいなか

ったのである。したがってアブラハムだけが作業進度違反を口にした理由が説明されねばならない。ここで若い者と年長者の対立ということが考慮される必要がある。亜鉛の削ぎ取り作業は重労働なので、若いの方が楽にこなす上に、その分多く作業することになる。それゆえ、年長の労働者は自分の能力の衰えに目をつけられ、首になるのではないかという不安を抱いており、また若い者も年長者で仕事ができるのいいやつはやめさせろといった圧力をかけていた。ところでストリップバーの組のうち、年長者同士の組は二番台（アブラハムとベンソン）であり、また若い者同士の組は四番台（アベルとドナルド）であり、他の二台は年長者と若い者が組になっている。また四番台の組はいつでも最初に作業を終えていたが、二番台の組は作業が緩慢で時に一時を過ぎても終わらないこともあったのである。したがって最初の非難が二番台から四番台へ向けられた背景には、若い者と年長者の対立があると解釈できる。非難は、最も平均年令の高い組から最も低い組に向けられたのである。

それでは若い者の能力の優越性を、作業を少々速くやることによって証明したはずのドナルドを他の若い者は支持せずに、彼らがむしろアブラハムに味方したのは何故なのか。この疑問に対しては、アフリカ人に一般的にみられるイデオロギー、すなわち若い者は年をとった者を、父親のように尊敬すべきであるという規範を持ち出すことにより、ドナルドがアブラハムの非難に対して反抗的な態度をとることによってこの規範に背いたからだと説明することもできる。しかしながらアフリカ人一般にみられるもう一つの規範、すなわち老人の多くは、アフリカ人が非常に恐れる呪術を他人（とくに若者）にかける力をもつという信仰が考慮されなければならない。アブラハムが呪術をかけるかのように見せたのは事実であるから、それを非難したドナルドが若い者の支持を受けて当然だと考えることもできるのである。ロトソンのような若い者がそうしなかったのは、作業チームが若い者と年長者へ

と分裂して、作業が円滑にいかなくなることを懸念したからかもしれない。だがその懸念は、過去の似たような口論に比べて、それほど強いものとは感じられなかったとカフェラーは指摘している。

ここまでの規範的分析によって説明しえたのは次のことである。非難が二番台から四番台に向けられた理由、若い者がアブラハムの非難の根拠である作業進度違反を支持する発言をしなかった理由、 دونالدが呪術のことでアブラハムを非難した理由。だがそのような規範的分析によっては説明しえない問題が数多く残されている。第一に、非難した者がベンソンではなくアブラハムだったこと、また非難された者がアベルではなくDonaldだったこと。第二に、Donaldが呪術に関して非難したにもかかわらず若い者から支持されなかったこと、そして第三に、作業進度違反や呪術といった、若い者と年長者の間の深刻な対立を引き起しかねない重大な規範の侵犯が指摘されたにもかかわらず、その問題が労働者達の反応をあまり引き起こさず、むしろあだ名で呼ばれたとか酔っ払っているとかいいたささいな事柄が強調されたのはなぜかという問題である。

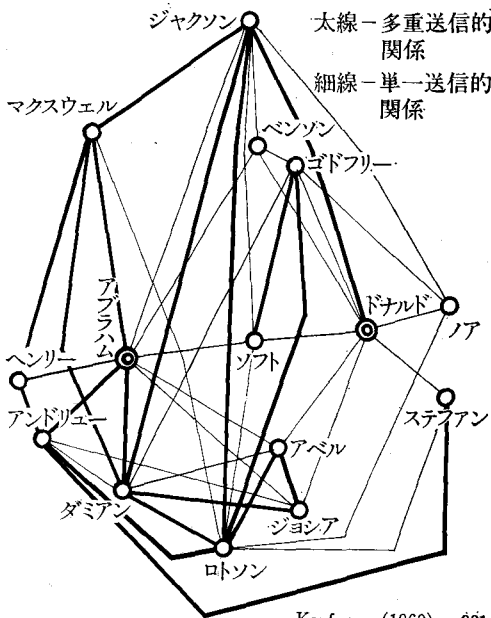
要するに、葛藤状況においてはさまざまな規範が持ち出されてくるので、現実に入々がとった行動を規範だけに頼って説明することはできないのである。

三 支持の動員とネットワーク

そこでカフェラーは、「ある人が、ある状況において獲得する支持の量は、その人の直接的・間接的対人関係の構造と性質によって条件づけられている⁽¹⁰⁾」という仮説を立てて、葛藤状況において人々が争いの当事者の一方を支持した理由を、ネットワーク構造との関連で分析しようとするのである。

カフェラーがネットワーク構造の変数として用いるのは、「密度」(density)「多重送信性」(multiplexity)「次

図2 行為者間の関係



Kapferer (1969) p.231

数」(degree)、「中心性」(centrality)などであるが、このうちカフェラーが最も重視しているとみられるのは、「多重送信性」の概念である。彼はまず作業室内の労働者達の間で五つの交換内容(exchange content)——会話、冗談行動、仕事の手助け、個人的サービス、金銭の援助——がやり取りされていることを発見し、それらが労働者間に存在する関係ごとにいくつあるかを計算した。そして二つ以上の交換内容をもつ関係を多重送信的関係(multiplex relation)、「一つだけ交換内容をもつ関係を単一送信的関係(uniplex relation)」として分類した。労働者間に存在するすべての単一送信的・多重送信的関係を图示したのが図2である。以下多重送信性の概念を中心に

カフェラーの議論を追い、密度、中心性、次数に関する説明は省略することにする。

口論の当事者であるアブラハムとドナルドのネットワークを比較してみると、明らかにアブラハムの方が多重送信的関係を多くもつばかりでなく、アブラハムと直接連結している人々の方が、ドナルドと直接連結している人々に比べて、より多くの多重送信的関係をもっている。したがってアブラハムは自分と直接連結していない人(例えばステファン)、および彼とドナルドの両者が単一送信的関係によって連結し

ている人（例えばロトソン）を自分の味方にする力をより多くもっていることになる。何故なら、ステファンの場合、アブラハムはアンドリュースとの多重送信的関係、およびアンドリュースとステファンとの多重送信的関係を通じてステファンに圧力をかけることができるが、ドナルドはステファンとは直接的であるとはいえず単一送信的関係しかもっていないからである。ロトソンの場合もほぼ同様の説明が可能である。

二人の口論当事者の両方と連結している人々はジャクソンを除いてすべて単一送信的関係によって両者と連結している。アブラハムはこれらの人々のうち、ソフトを除くすべての者と、多重送信的関係を二つないし三つたどる別のルートを通じて到達することができるが、ドナルドはジャクソンを除いて、そのような多重送信的ルートをもっていない。

このように直接的・間接的な多重送信的経路をどれくらい多くもつかによって、アブラハムとドナルドの間に支持動員能力の著しい差が生ずることは明らかである。そしてより複雑な立場にいる人間（例えばソフトやジャクソン）がドナルドではなくアブラハムを支持した理由についても、多重送信的関係のより複雑な連鎖に着目することによって説明することができる。またアブラハムが四番台のアベルではなくドナルドに非難の矛先を向けた理由も、一言でいえば、アベルは有力者であるロトソン（組合役員）、およびジャクソン（クルーボス）と多重送信的関係によって結ばれているために、非難しにくかったからである。一方ドナルドはアベルほど効果的に報復しうる可能性が高くないために非難の的になったと解釈できる。

さて規範的分析では説明しえなかった第三の問題も、二人の有力者ダミアンとロトソンがとった態度によっては説明が可能である。すなわちダミアンは何人かの若い者と連結しているので、もし彼が作業進度違反や呪術の問

題を重大視したなら、彼ら若い者との緊密な関係がうまくいなくなる可能性があった。そこでダミアンは、あまり論争的にならないような規範に訴えるほうがよいことに気づき、若い者が年を取った者への敬意にかけるといった、あまり興奮を呼び起こしそうな問題も話題にしたのである。ロトソンもまた、組合役員としての役割にとって重要な多重送信的關係を損ないたくないと考えて、ドナルドは酔っ払っているとか、状況を誤解しているといったささいな問題について意見を述べたのである。作業進度違反や呪術といった重大な規範を持ち出したのは口論当事者であるアブラハムとドナルドであった。しかし彼らはそれによって他の人々を動かさうとするほどの有力者ではなかった。これに対してダミアンとロトソンは有力者であり、したがって彼らは、重大な規範の対立が作業チームの分裂に至るのを避けるために、ささいな問題を強調することに関心をもったのである。

ところで以上の分析には一つの重要な前提が存在している。それは、カフェラーが多重送信性をはじめとするいくつかの変数を用いて分析したネットワーク構造の特徴を、口論に関与した労働者達自身が、口論の起きる以前にすでに認識していたという点である。それを証明する事実としては、アブラハムがドナルドを突然槍玉に上げたこと、およびアブラハムがどなり声をあげた直後から、あるいは彼が他の労働者達に圧力をかけ始める以前に、人々はアブラハムを支持する態度を取っていたことなどを挙げることができる。すなわち人々は口論が始まった時に、アブラハムのネットワークの方がドナルドのそれよりも強力であることを想起して、アブラハムにつく方が失うものがより少ないと判断したことになる。

カフェラーは以上に述べてきたような分析結果から、次のような命題を引き出している。「人々は、当該状況内の諸関係のセット全体への自己の投資に対する損失を最少限におさえるような仕方⁽¹¹⁾で口論に関与するだろう。」

ここでカフェーの研究に対する筆者なりの評価と若干の疑問点を提起しておきたい。

カフェーは、ボットにおいては不明確なままであった規範選択過程に働く要因を、ネットワーク構造そのものに求めている。とりわけ多重送信的関係とその連鎖に焦点をあてることによって、葛藤状況において人々は、多重送信的関係を維持するのに最も適した規範、あるいは多重送信的関係を通じて自分に加えられた、または加えられると予想される圧力を回避するのにもっとも有効な規範を選択することを明らかにしたのである。

しかしながら筆者が疑問に思うのは、第一に、このような規範の選択は、たとえ意見が対立し合う規範であっても、葛藤状況におかれてはすべての人間が、選択の対象となるさまざまな規範のすべてを内面化しているような場合にのみ可能なのではないかという点である。いいかえれば人々が、それぞれの規範が何を意味し、それを用いた場合人々にどんな効果を及ぼすかを明確に認識してはじめて規範の選択が可能であったと思われるのである。したがって人々が互いにどのような規範をもっているかを十分に確認しえないような状況においては、規範選択の余地はごく限られたものとなり、誰でもがもっているきわめて一般的な規範しか選択しえないことになるのではないだろうか。

第二に、人々は自分自身が関係している他者それぞれがもっている関係、さらには作業室内の全員のネットワーク構造を熟知しているからこそ、規範の選択が可能であったという点である。このような状況が生ずるのは、かなり長期に渡ってネットワークの構成員に変化がない場合であらう。したがってネットワーク構成員の交替がかなり頻繁に行なわれる流動的な状況においては、カフェーが分析した規範選択のメカニズムは作動しえないと思われるのである。

第三に、カフェラーは選択可能な規範として既存のもの、伝統的なもののみをとり上げている。同時に多重送信的關係に関しても、人々が過去にその關係に投資した交換内容のみを指標として取り出している。これらのことはカフェラーが対象とした事例そのものがそういう性質をもっていたからだとも考えられる。だが、人々は必ずしも既存の規範、伝統的規範ばかりではなく、革新的、創造的な規範を選択しようとするかもしれない。また人々は過去の投資ばかりではなく、關係への新たな交換内容の投資とそれがもたらす利益を期待して行動するかもしれないのである。

要するに、カフェラーの場合には、当該状況内のすべての人々が共通の規範を内面化し既存の關係の枠内で行動することを前提にして、それらの既存の規範や關係を自己の目的にどう活用するかという問題に焦点が当てられているのであって、規範や關係それ自体の獲得形成のプロセスは分析の射程外に置かれているのである。だが複雑で流動的な都市的産業社会では、人々が共通の規範を内面化するという状況は減少しつつある。また人々は既存の社会規範や關係の枠内で行動するばかりでなく、むしろ新しい規範や關係に依拠して行動する傾向を強めている。そのような状況を分析する枠組をカフェラーの研究から導き出すことは難しいように思われる。

四 結 語

ミッチェルは、ネットワーク分析の動向をレビューした一九七四年の論文の中で、ネットワーク概念を用いたそれまでの諸研究を、それらの基礎にある理論的パースペクティブという面から検討すると、大きく二つのものに分

けることができる、と述べている。⁽¹⁰⁾ 一つは、ネットワークを通じた「規範的合意や地位の定義の確立」に関心をもつもの、他方は「目的達成のために自分もっている絆をどのように操作するか」に関心をもつものである。そして前者を「構造的パースペクティブ」、後者を「取引行為 (transaction) 的パースペクティブ」と名づけている。そしてボットの研究を前者の中に、またカフェラーの論文を後者の中に含めている。

ボット以降のネットワーク研究の動向をみる時、取引行為的パースペクティブが圧倒的優位に立っていることは明らかである。ミッチェルの分類は、ネットワーク分析の理論的基礎の移動を明確にし、従来の構造機能主義的枠組からの脱却の方向を示しているという意味では非常に有効なものだといえる。しかしながら、その方向は、けっしてネットワーク分析から規範的要素を放逐するものであってはならないだろう。むしろ規範を所与のものとして考えるのではなく、ボットおよびカフェラーの提起している規範の選択性という考え方をさらに押し進めて、創造的な規範選択とネットワーク構造との（したがって取引行為過程との）関連を問うことが社会的ネットワーク分析の重要な課題になると考えられる。

注

- (1) 社会的ネットワーク概念の初期の研究史については、Mitchell (1969, 1974) を参照のこと。またこの概念の近年の展開については、さしあたり Wellman (1981) を参照のこと。
- (2) ネットワークの構造的諸概念についての簡明な整理は、Boissevain (1974) pp. 24-48. で行なわれている。
- (3) Bott (1957) pp. 52-96.
- (4) ボットのいう「連結度」は、今日では「密度」(density) と呼ばれるのが一般的になっている。Mitchell (1969) pp. 17-9. 参照。
- (5) Bott (1957) p. 60.
- (6) ボットの研究は家族社会学者の間に広い反響を呼び、ボットの仮説を検証しようとする論文が次々と現われた。これらの諸論文の要約的

な紹介と整理は、上子武次「一九七九年」一一九―三七頁で行なわれている。

- (7) Bott (1957), pp. 192-215.
- (8) ボンホーの日記を著したとされているが、Boissevain (1974), pp. 49-66. を参照しよう。
- (9) Kaplerer (1969) p. 243.
- (10) Kaplerer (1969) p. 209.
- (11) Kaplerer (1969) pp. 191-3.
- (12) Mitchell (1974) pp. 285-6.

文 献

- Boissevain, J. (1974) *Friends of Friends*. Oxford: Blackwell.
- Bott, E., (1955) *Urban Families: Conjugal Role and Social Networks*, Human Relations Vol. 8, pp. 345-83.
- (1957) *Family and Social Network*, London: Tavistock.
- Gottlieb, B., ed., (1981) *Social Networks and Social Support*, Beverly Hills: Sage.
- Kaplerer, B., (1969) Norms and the Manipulation of Relationships in a Work Context, In Mitchell, ed., (1969) pp. 181-244.
- 上子武次「一九七九年」『経済学雑誌の日記』…キーマン 創刊
- Mitchell, J. C., ed., (1969) *Social Networks in Urban Situations*. Manchester: Univ. of Manchester.
- (1969) 'The Concept and Use of the Social Networks', In Mitchell, ed., (1969), pp. 1-50.
- (1974) *Social Networks*, Annual Review of Anthropology No. 3, pp. 279-299.
- Wellman, B. (1981) Applying Network Analysis to the Study of Support, In Gottlieb ed., (1981), pp. 171-200.